

拝啓 今年も早や4月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。コロナ・ウイルスの蔓延は、日本でも、医療崩壊が起きるのではないかと心配になります。私の家の近所には、公園や緑道がたくさんあり、毎日朝、昼と散歩に努めています。散歩して、新緑の木々や花を見ていますと、落ち込もうとする気持ちをおさえ、多少でも前向きな元気が出てくるように感じています。

今回は佐生健光さんの『キリスト教と称名』の第2回です。佐生さんは小西先生に長年師事され、小西先生発行の『よろこび』という月刊伝道誌のガリ切りも手伝っておられましたから、小西先生から聞かれた言葉で心に残った言葉をいろいろな機会に記されています。宗教の先生の言葉は、側にいた弟子が書き残した言葉によって、後世に伝わっていくように思います。

5ページの「仰ぐことと称えること」には、次のように書かれています。

「内村先生の文章にある『十字架のキリストを仰ぐ』という言葉に注目したい。小西先生は十字架を仰ぐでも、み名を称えるでもよいと言われた。自分の信仰は常に揺れ動くし、妄念に汚されてさえぎられる。だからそんなものはあてにならないと言われた。先生はかつて、我々は薄い信仰、弱い信仰でよいのだとも言われた。その故は、我々は自分の信仰によって救われるのではなく、『主の十字架』の贖いによって救われるからであるから。」

テレビで、新型コロナに関連する報道番組をいろいろ見えています。報道番組は、政府の行なっていることに対して批判的な報道が多いように思いますが、元公務員だった自分としては、コロナ問題は、突発的であり、経験も少なく、国も、厚生労働省を中心に、財務省、総務省、文部省、法務省、経産省、防衛省、国土交通省、外務省などほとんどすべての役所に関係し、都道府県が深くかかわり、具体的施策の実施の段階では市町村になり、医療の世界はまた大変な専門家の社会だろうし、実際の任務に当たる人は大変だろうな、と思いながらテレビを見えています。

南原研究会では、毎月の読書会と一年に1回の総会があるのですが、対面の会合は中止しましたが、ZOOMという仕組みを使って、パソコンで会議をやろうという提案があり、その準備などで、結構忙しくしています。2, 3回3人ほどでズームの練習をしましたが、パソコンに写る参加者の顔を見ながら、声も聞けて、自由に会話ができる仕組みでして、なるほどこれは便利だ、活用したいと思って取り組んでいます。

南原先生は、国連を強化し、世界連邦に進むべきだという考えを書かれています。新型コロナ対策では、各国は自国民を守るために入国規制する必要があります。新型コロナは、ずいぶん大きな問題を人類に投げかけていると思いますが、国連改革のきっかけになればよいと思います。普段の年でしたらつつじが咲いて、新緑を見て心が晴れる時期ですが、今年は新型コロナの為に複雑で沈んだ5月になります。皆さまもお身体ご自愛され、お過ごしくださいますように。

4月23日

山口周三

エンカウンターの読者各位